



晩年の石川三四郎 昭和30年10月30日、自宅で西山勇太郎氏撮影。



「旭山(石川の筆名)は、翁に対しては殆んど駄々っ児のように親しんでいた」(本巻 145ページ)。明治43年、上京した田中正造を囲んで。日暮里の逸見斧吉宅にて。石川が出獄まもなくの頃と推定される。右から前列逸見斧吉、石川三四郎、田中正造、木下尚江、福田英子、堤某、後列荒川充雄、1人おいて木下操子、西田天香、逸見菊枝、板倉道子。



石川三四郎とポール・ルクリエ夫妻。大正3年10月、ドイツ軍占領下のブリュッセル、ポール宅にて。この月、ポール夫妻はフランスへ脱出。翌年1月、石川三四郎も脱出した。この間の動静は第2巻所収の「籠城日記」に詳しい。

明治37年11月、週刊『平民新聞』一周年記念として発行された「共産党宣言」号が発禁になった折に撮影。右 西川光次郎、中央前 石川三四郎、後 堺利彦、左 幸徳秋水。大逆事件後、「ジャパニズ・マターズ(日本殉道者達)の肖像として世界各国に広められた」(本巻19ページ)のは、この写真に幸徳が各人の姓をローマ字で書き加えたものである。石川三四郎が「ちよびひげを削り落しているのは、滝野川の園遊会(開催禁止となった)の仮装行列で「女学生に扮するつもりだった」ためだという(本巻100ページ)。



ポーランド独立運動の志士ビルドスキーを歓迎した新紀元社の面々。明治38年末、神田駿河台のすき焼屋「いろは」にて。右より前列柴田三郎、逸見斧吉、中列1人おいて、木下操子、逸見菊枝、福田英子、1人おいて熊谷千代吉。後列安部磯雄、ビルドスキー、木下尚江、石川三四郎、通訳、横田兵馬。



目次

資料をたぐりながら『自叙伝』を口述中の石川三四郎。自宅の病室にて。左端は石川永子。昭和31年8月。



主人を喪った朝の不盡草房。昭和31年11月29日撮影。昭和2年5月、石川三四郎はここに居を移し、「土民生活」を開始した。